



秋を彩る 美術展から

若林奮の《Run and Rest》を中心に

「秋は芸術」と書き出してみました。気候変動により細やかな日本の四季のうつろいは、やがて夏と冬の二季のみとなってしまうかねないリスクを思えば、この決まり文句を持ち出すのもいさか暢気過ぎるのかもしれませんが。それでも厳しい夏を体験した後は、より一層秋への想いが切実としたものとなるのは人情というものでしょう。芸術の秋、食欲の秋、スポーツの秋、読書の秋…、さて皆さんは、どのような秋をお過ごしですか。

練馬区立美術館は、秋のシーズンに合わせて3つの展覧会を組みました。「若林奮ーRun and Restー」寺田真由美ー不在の存在ー」展、「アーツ中村橋 2026ーわたしとまちの記憶」展、「ユアサエボシと戦後アヴァンギャルドの変身寓話集」展（2面に概要掲載）です。このなかで、当館の新収蔵品による若林奮と寺田真由美の



2人の作家の個展は、先行して7月より開催されたので、ご覧になった方も多いのではないのでしょうか。遅ればせながら、ここで紙上レポートをさせていただきます。

「不在の存在」と題された寺田の個展は、室内の扉が半分開いていたり、カーテンが風でなびく一瞬を捉えた写真作品を中心に構成されました。人の存在を強く感じさせながら、誰もいない室内を撮った写真作品は、リアルですが現実を写し出したものではありません。寺田は室内模型をまず作り、本物の一室のように見立てて撮影することにより、現実と虚構との狭間に連なる世界を静謐に、しかし劇的に表現しました。今回の個展は、初期の立体作品と近年の彫刻作品を加え、寺田の40年にわたる制作活動を垣間見るものでした。

寺田展がテーマとした「不在の存在」は、実は同時開催となった若林展にも通底していたように思います。若林展唯一の彫刻作品《Run and Rest（走り、休む）》（1996年）は、鉄による彫刻一対を並置し、V字を構成する空間表現となっています。この作品は、



谷をイメージした壮大な作品《Valleys（谷）》（1989年）と形態は類似しており、犬の視点から見た《Valleys》として作品化されたと考えられますが、犬の実際の姿は登場しません。しかしながら、《Run and Rest》のV字の内側は犬が駆け抜けるのを想定した幅員と、犬の視界を遮る高さが確保されており、また谷の外側には、犬の休憩場所とおぼしき小屋のような空間も設けられています。若林は、V字谷と犬を描いたドローイングも数多く残しており、その一部は本展にも出品されました。「不在の存在」である犬の視点に仮託することで、作家は風景の骨格や自然の背後を見続けようとしたのかもしれませんが。「見えないものを見ようとする若林さんがつくる彫刻が、見えないということを視覚化した装置だとしても、不思議ではないだろう」⁽¹⁾と、《Valleys》の恒久設置に尽力された原田光氏は語っています。

《Run and Rest》は、一見するとシンプルな構築物のような外観ですが、焼かれている内側斜面の鉄板は表面にゆるやかな凸凹を生じており、色彩のムラが抽象絵画のような深みと詩情をもたらしています。こうした絵画的効果がどこまで作家の意図するものであったか定かではありませんが、工業製品の鉄からは想像もつかない、豊かな鉄の表情に魅入られた鑑賞者も多かったことでしょう。「鉄で彫刻をつくるのではなく、彫刻によって鉄をつくる」⁽²⁾という若林の言葉を思い起こさずにはおけない作品として結実しています。

秋の展覧会に続き、2027年2月21日からは「野見山暁治展」を開催します。「アトリエ日記」の連載などエッセイストとしても活躍した野見山の文筆活動を、絵画作品とともに紹介する展覧会です。多くの皆様のご来館をお待ち申し上げます。

練馬区立美術館 館長 伊東正伸

註(1) 原田光「“Valleys”再生」『若林奮ーVALLEYS』展図録 横須賀美術館 2008年
《Valleys》（1989年）は、もともと室内展示作品として制作されたが、2006年、横須賀美術館の前庭に屋外彫刻《Valleys（2nd stage）》として再設置された。若林はほぼ最後の仕事として再設置に力を注いだものの、完成を見届けることなく2003年に逝去。全長46メートルの彫刻は、今も同館へのアプローチとして強い存在感を放ちながら来館者を迎えている。

註(2) 若林奮、前田英樹『対談・彫刻空間 物質と思考』書肆山田 2001年
写真撮影：山本糾

ユアサエボシと 戦後アヴァンギャルド の変身寓話集



「大正生まれの架空の三流画家」に擬態して作品を発表する現代美術家のユアサエボシ（1983-）と、当館収蔵作家の池田龍雄（1928-2020）、高山良策（1917-1982）、中村宏（1932-2026）らを中心に、戦後にアヴァンギャルドをこころざした美術家を紹介します。



ユアサエボシは、古い雑誌や新聞、インターネットをもちいて集めたイメージを組み合わせ、絵画を制作しています。さらに、ユアサは絵画とともに、「大正生まれの架空の三流画家 ユアサエボシ」（1924-1987）の生涯の物語を創作して発表してきました。ユアサは、過去のイメージに着想を得て描くことで架空の物故画家「エボシ」へと変身することから自身を「擬態派」と呼び、「エボシ」が生きたという戦後と現代を往還することを試みています。本展覧会でユアサは新作を発表します。それにあわせて「エボシ」の年譜に新たな出来事が書き加えられ、作品にまつわる新たな物語が明らかになります。

池田龍雄は、特攻隊としての訓練を続けるなかで終戦を迎え、戦後、上京してさまざまなジャンルの芸術家と交流しながら前衛運動にかかわりました。そのなかで、繊細で濃密なドローイングによるペン画を多数描き、政治や社会に翻弄されて変質する人間の生き方を問いました。高山良策は、福沢一郎絵画研究所で短期間学んだのち出征

し、戦後は都市や機械的な造形と民俗的でエロティックなモチーフを組み合わせた心象風景を描きました。中村宏は、幼少期に身近に接したセーラー服の女学生と、戦時下に憧れと恐怖を抱いて見た飛行機や蒸気機関車とを融合させたイメージを、絵画やグラフィックの仕事において繰り返し描きました。

池田、高山、中村をはじめとする戦後アヴァンギャルドの作家たちは、第二次世界大戦後、傷ついてゆがめられた人間やキメラ的な怪物、不気味な仮面などのイメージをとおして、戦争の記憶や戦後社会の矛盾、人間像の変容を描き出しました。これらの表現は、シュルレアリスムやルポルタージュ絵画運動に関心を寄せた作家たちの現実への深い洞察から生み出されています。彼・彼女らは見慣れた姿からの変身や変形と、その背景にある出来事を寓話的に伝える独自の世界を切りひらきました。

本展覧会では、池田、高山、中村と、彼らの表現に着目してきたユアサに加え、同時代を生きた、芥川（間所）紗織（1924-1966）、桂ゆき（1913-1991）、鶴岡政男（1907-1979）、古沢岩美（1912-2000）らの作品も紹介します。戦後美術における「変身」のモチーフの広がりをたどることは、イメージをつうじた過去との対話のあらたな機会となるでしょう。



上) 高山良策 [タイトル不詳] 1957年 油彩・キャンバス 練馬区立美術館蔵
中) ユアサエボシ 《傀儡の王》 2026年 アクリル・キャンバス 作家蔵
下左) 中村宏 《似而非機械》 1971年 油彩・キャンバス 練馬区立美術館蔵
下右) 池田龍雄 《賑やかな人々》 1956年 油彩・キャンバス 練馬区立美術館蔵

小説家の小川哲（1986-）が特別協力！ 架空の詩人による「ユアサエボシ」の絵画の秘密にかかわる詩を発表します。

Exhibition

ユアサエボシと戦後アヴァンギャルドの変身寓話集

会 期：2026年 10月31日（土）～ 12月27日（日）

休館日：月曜日 ※ただし、11月23日（月・祝）は開館。11月24日（火）は休館

Events

イベント

こどもから大人まで幅広い世代の方に向けたプログラムで、みなさまのご参加をお待ちしています。

《注意事項》 イベント内容や申込方法などの詳細については、各イベントの開催日および1ヶ月前の当館ホームページ (<https://www.neribun.or.jp/event/event.cgi>)、またはイベントごとの広報物(チラシまたは区報)をご覧ください。
※ 日程などは変更になる場合があります。

アートマルシェ 2026



↑「アートマルシェ 2025」の様子

今年の秋も、アートマルシェを開催いたします！美術の森緑地での出店のほか、ワークショップ、パフォーマンス・アート、読聞かせ、リサイクル本頒布会など、盛りだくさんの内容を予定しています。

日時：11月7日(土) 8日(日) 10:00～15:00

会場：練馬区立美術館、美術の森緑地

主催：練馬区立美術館(公益財団法人練馬区文化振興協会)、練馬区
共催：練馬区立貢井図書館

練馬の博物誌 - 美のカケラ「成果発表展」

美術家・インディペンデントエドゥケーターの榎本寿紀氏を講師に迎え、4つのコースからなるワークショップで練馬区の文化資源を探ってきました。「成果発表展」では、それぞれのコースで制作した水彩画、コラージュ、立体作品を、当館所蔵作品とともに一堂に会した展示を行います。

会期：2027年1月28日(木)～2月14日(日)

10:00～18:00 ※月曜日は休館

会場：練馬区立美術館 2階展示室 観覧料：無料

↓ 練馬の博物誌 A・B コースの様子



小学生ワークショップ 「手作りの絵具で描こう(仮)」

画家の千村曜子さんと、絵具を作成して、風景を題材に描く、2日間のワークショップです。また制作した絵画は、年明けに作品展示を行います。皆で楽しく描いて、この冬の思い出にしませんか？

日程：12月5日(土) 19日(土)

時間：①10:00～12:00 ②14:00～16:00

対象：①小学1～2年 ②小学3～6年

費用：未定 会場：練馬区立美術館 創作室

作品展示も行います！

会期：2027年1月13日(水)～1月24日(日)

10:00～18:00 ※月曜日は休館

会場：練馬区立美術館 2階展示室 観覧料：無料

スクールプログラム

学校の学習として美術館について知り、美術に親しんでいただくためのプログラムです。学芸員が学年やご要望に合わせて内容をつくります。

① 団体鑑賞

展覧会を学校団体が鑑賞していただくプログラムです。

② 施設見学

美術館の建物を巡り、機能や設備を紹介します。社会科見学や博物館学習などにもご活用ください。

③ 出張プログラム

美術館担当が学校へ出張し授業をお手伝いします。美術館の紹介や、所蔵作品の紹介、所蔵品カードを使ったゲームなどを組み合わせた内容を提案します。

※展示替え期間およびイベント開催日等、繁忙期はスケジュールの調整により件数を制限する場合がございます。何卒ご了承ください。

School program

野見山暁治展

会期：2027年2月21日(日)～5月9日(日)

Exhibition

練馬区は近代から現代にかけての大きな、そして、多彩な足跡を遺した画家、野見山暁治(1920～2023)が50年以上に亘りアトリエを構えたゆかりの地です。1996年の回顧展を皮切りに、その追悼展(2024年)まで3度にわたり当館所蔵の約100点に及ぶ作品を中心に、野見山芸術を紹介してきました。

野見山は作画活動の一方で、エッセイストとしての一面も私たちにその人間的魅力を発信し続けてきました(第26回日本エッセイストクラブ賞受賞)。

本展ではそうした作画活動と共に文筆家としての面を合せた、“画文一致”の野見山暁治像を浮かびあがらせます。

池上秀畝 《桜花雙鳩・秋草群鶉図》

おう か そう きゅう しゅう そう ぐん じゅん ず

大正 10 (1921) 年 絹本金地着色 二曲一双

collection



絹本の屏風というのも稀なうえに、金箔が施された、とても煌びやかな画面に対角線構図で春と秋の花鳥が描かれている。右隻は桜に鳩というやや異色な組み合わせで、形式ばった花鳥画とは異なりずいぶんと躍動感たっぷりに表現されている。桜の枝から羽をいっばいに広げて急降下していく白鳩と、筋肉質の身体を両足で踏ん張り、まるで獲物を見定めるかのごとく首をもたげる斑入りの一羽が描かれる。一方、これに呼応する左隻は可憐な草花が咲き乱れ、その合い間に丸い鶉が転がるように配される。鶉は古くから土佐派のお家芸として描かれてきたが、より装飾性の高いこの左隻は江戸琳派、殊に酒井抱一の花鳥を念頭に置いていることは疑いない。《夏秋草図屏風》

(東京国立博物館 重要文化財)や《秋草鶉図》(山種美術館)などがその源泉であろう。しかし、右隻は琳派とは異なり、渡辺省亭であったり、小原古邨に見られるような西洋に目を向けた花鳥図に倣っているものと思われる。

池上秀畝(明治7～昭和19・1874～1944)は長野県伊那市、高遠の裕福な商家の生まれ。日本画家を志して15歳で上京、荒木寛畝の内弟子となって絵描きの道をスタートさせる。同い年で同じ南信州地域(飯田市)で武士の子として生まれ、同時期に上京した日本画家に菱田春草(明治7～44・1874～1911)がいる。春草はその年にできた東京美術学校に学ぶこととなる。岡倉天心を指導者とした革新的な日本画を目指した春草らは新派と呼ばれ、伝統墨守を重んじた秀畝らは、対して旧派と呼ばれた。双方とも当時は人気作家として名を馳せていたが、進歩史観偏重からか両者の知名度の差は歴然としたものとなってしまった。当館では1988年に「山水花鳥の美 池上秀畝展」、2024年には長野県立美術館と共催で「池上秀畝-高精細画人-」展を開催している。まとまって紹介されたことのない、旧派の、その実力を見せつけ、日本画の再編成を試みた展覧会であった。本図を見ると写真に裏付けられた躍動感と古典学習に基づく雅やかさが、空間の妙をもって一つにまとめられ、なにか一連の物語すら想像される。決して、旧派とて軽んじられる画家、一派ではないことをありありと証明する一点である。

学芸員 加藤陽介

施設の貸出について

美術への関心と理解をより深めるための諸活動や、創作および作品発表等にご利用いただくことを目的に館内の施設を貸出しています。ご利用になる施設によって、申込方法が異なりますので、詳細は当館ホームページをご確認いただくか、お問い合わせください。

区民ギャラリー 美術作品の展示発表を目的とする団体および個人に貸出します。
1日を単位として、連続6日まで利用できます。(展示・撤去作業の時間を含む)

名称	面積	利用時間	使用料
2階 一般展示室	85.5㎡	10:00～18:00	4,000円/日

※ ご利用の6か月前に利用申込の抽選会を行います。

創作室 主に美術作品の創作・研究・学習活動を目的とする団体および個人に貸出します。

名称	面積	定員	利用時間	使用料	貸出備品・器具など
2階 創作室	111㎡ (前室等含む)	30名	10:00～13:00	1,200円	作業台、スツール(椅子)、イーゼル、ホワイトボード、プレス機、石膏モデル等
			14:00～18:00	1,600円	

※ 練馬区施設予約システムからの申込となります。

編集後記

「若林奮展 / 寺田真由美展」が始まり、ようやく美術館が本来の姿に再始動しました。これまでワークショップ、イベント等は続けてきましたが、2025年3月以来の展覧会です。やっとこさです。今回の展示を皮切りに、戦後美術と現代作家のコラボ展、練馬から作品を発表し続けた野見山曉治展と、「うちらしい」ラインナップが続きます。
4月発行の次号では2027年度の展覧会・イベントもご紹介できることでしょう。お楽しみに。

第58回 練馬区民美術展

練馬区に在住・在勤・在学(15歳以上)の方々の日頃の創作活動の中から生まれた作品を展示する練馬区民美術展を開催します。毎年、油彩画、水彩画、アクリル画、日本画、彫刻・工芸など約250点の作品を展示し、会期中は練馬区美術家協会委員による作品講評会をおこないます。
本展では、練馬区美術家協会委員と美術館長による審査を行い、区長賞・教育委員会賞・美術館長賞・奨励賞・努力賞をそれぞれ授与します。例年、力作ぞろいとなっており、絵画や彫刻・工芸など4部門の様々なジャンルの作品を一度に鑑賞できる彩り溢れる展覧会になります。

出品作品の募集は2026年10月21日(水)から11月30日(月)です。詳細につきましては10月21日号の『ねりま区報』でお知らせいたします。まだ出品したことがない方も、ぜひご検討下さい。皆さまのご出品をお待ちしております。

会場：練馬区立美術館 3階企画展示室
会期：2027年2月6日(土)～2月14日(日)

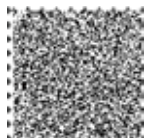
※ 2月8日(月)は休館、最終日は午後2時まで



昨年度第57回練馬区民美術展の展示風景

Uni-Voice

発行・問い合わせ：



ももっとアート
練馬区立美術館
NERIMA ART MUSEUM

〒176-0021 東京都練馬区貫井 1-36-16
TEL 03-3577-1821
HP : <https://www.neribun.or.jp/museum.html>
X : @nerima_museum

